

FishWatchr を利用した日本語授業評価

— 評価観点の多様化に着目して —

**Evaluation of a Japanese Language Class Using FishWatchr:
A Focus on the Diversification of Evaluation Viewpoints**

西谷 まり

要旨

本研究は ICT ツールである FishWatchr (以下 FW) を活用することにより、日本語の模擬授業評価観点の多様化の育成が可能であることを検証するものである。授業評価観点の変化を見るために期間中に 3 回、評価観点リストを提出させた。対応のある t 検定で比較したところ評価観点の数は有意に増加していることが明らかになった。受講学生の一人に焦点をあてた自己評価の分析からも、回数を重ねるうちに、授業の見方が多様化し、自己評価が高くなることがわかった。生徒役を経験した後に行う紙による評価と、授業と同時進行で注釈づけをする FW 評価では評価状況が異なることから、評価の観点が異なり、紙評価と FW 評価を併用した模擬授業評価は、評価観点の多様化の育成に効果があることが示唆された。

キーワード : FishWatchr 日本語教育 模擬授業 評価観点 多様化

1. はじめに

筆者は 2005 年度から、大学院の授業において、日本語初級の模擬授業を担当している。2015 年度までは模擬授業者以外は生徒役になって、授業直後にフィードバックシートの記入を行っていたため、個々の教授行動に関する細かい指摘は少なく、全体的な印象になりやすかった。そこで、2016 年度の授業から FishWatchr (以下 FW) という ICT (Information and Communication Technology) ツールを利用して授業と同時進行で評価を行う機会を設けることにした。

山崎岳ほか (2011) は「授業の質を高めるためには、他者からの評価を元に授業を振り返り、反省することが大切であるが、授業後の反省会等で意見をもらう方法では、参観者の意図を十分に受け取ることが難しいという問題がある。また、授業の様子をビデオに記録し、後の反省会等で映像を見ながら分析する方法もあるが、限られた時間の中で全てを検討するのは極めて困難である」とし、これらの問題を解決するためにビデオカメラで録画した映像とともに参観者のメモを同期させて閲覧できるようにしたシステムを開発した。「授業を改善し、質を高めるには複数の人の見解が必要であり、授業評価記録ツールで記録された参観者のメモを複数表示することを可能にした。メモされた場面を振り返ることは重要であるが、長時間撮影された授業映像から必要シーン探しだすのは困難であるため、参観者のメモと映像との同期再生を可能にした」と述べている。FishWatchr は目の前で行われて

いることに対して、学習者が簡単に注釈づけしたり、その結果を視覚的に閲覧できる機能を実装している無料のツールである(山口ほか 2016)。図1が実際のFWの画面である。西谷、岩崎(2016)では、模擬授業を見ながら行うFW評価と模擬授業後の従来の紙による評価(良かった点・真似したい点と問題点・改善案を簡単に記述する様式)の両方を実施した結果、それぞれの評価に特徴があることが明らかになった。評価を受ける側にとって、紙の評価よりFW評価のほうが有益であると認識された。紙の評価は学習者の観点で、FW評価は教師の観点で行っていることも明らかになった。良い・悪いの注釈ラベル(ボタン)を押すだけであれば難易度は高くないが、その場で注釈づけをすることはIT技術が高くない学生にはハードルが高いのではないかと思われたので、模擬授業開始前に2回の練習セッションを行った。学生それぞれのファイルを集めてFWに装備されている「マージ」機能で1つのファイルにまとめると、評価の分布、評価者それぞれの評価のちらばり、コメントが集中している時間がわかるようになっていく(図2)。



図1 FWでの作業手順

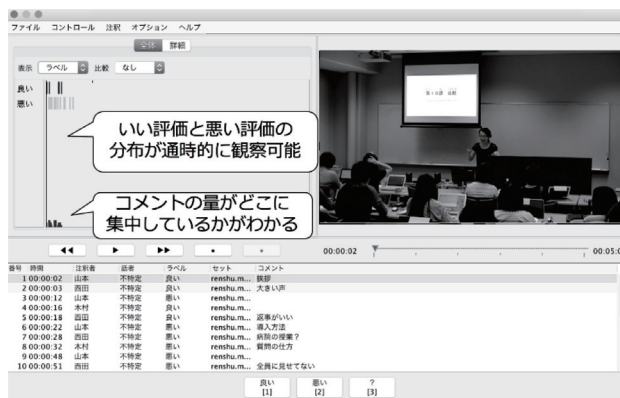


図2 コメントの分布

2. 授業の概要

今回の授業の対象は9名で、日本人日本語教育経験者3名、外国人留学生6名（中国人4名、ベトナム人1名、アゼルバイジャン人1名）で、留学生の1人は日本語教育経験者である。授業の期間は2017年4月から7月で、模擬授業の総回数は36回、1人4回ずつ15分～25分程度の授業を行うものである。授業前に教案と使用するPower Pointの資料を筆者にメールで送り、コメントを返ししながら、教案を練り上げていく。やりとりは1回の模擬授業につき平均2回であるが、4、5回のやりとりを行うこともあった。授業中はFW評価者と生徒役は別々のエリアに着席し（図3）、模擬授業終了後に生徒役は紙の評価シートに記述する時間をとった。つまり、学生は授業期間内にFW評価と紙の評価を両方とも体験することになる。FWの注釈ラベル（ボタン）は、「良い」「悪い」だけでなく「？」の項目を付け加えた。授業後に教師役の学生には録画したビデオと紙の評価コメント、学生役のFW評価を全員分マージしたものを渡し、それを見たうえで、自己のFW評価と振り返りシート（資料1）を筆者に送らせた。2016年度の授業では、授業者はビデオのみを持ち帰り、FW自己評価を行ったあとで学生役のFW評価をマージしたものと紙評価コメントを渡した（図4）ためか、自己評価が低くなる傾向があった。2017年度は他者評価を見てから自己評価を行う形にした（図5）。

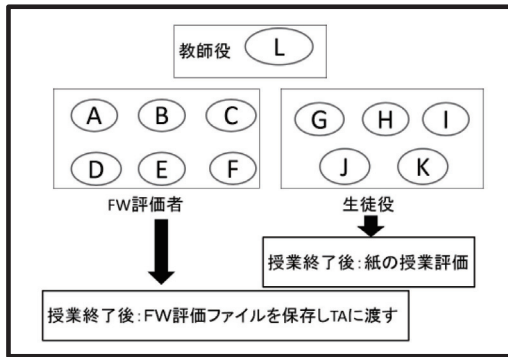


図3 授業形態

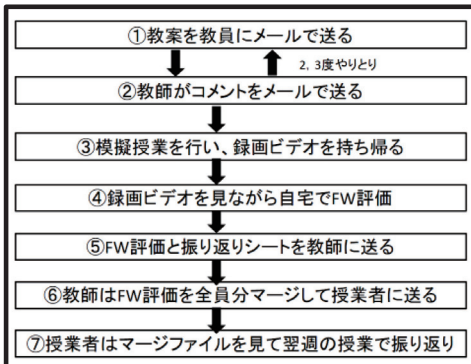


図4 2016年度模擬授業者のフロー

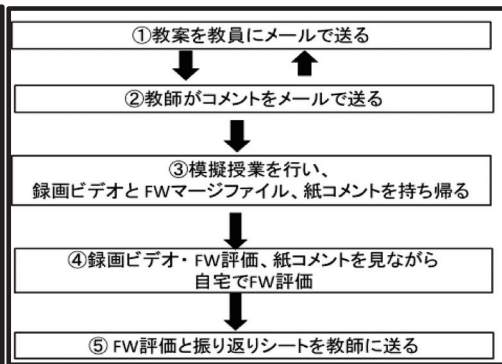


図5 2017年度模擬授業者のフロー

3. 評価観点の変化

評価観点の多様化について調べるために、3回の調査を行った。1回目は、3つのグループに分かれて、2016年度の授業のFW評価をビデオとともに視聴して評価観点を抽出、クラス全体で共有した後、それらを踏まえて、宿題として各自の評価観点を提出させた。2回目は、各自が2回の模擬授業を行い、FW評価と紙評価をそれぞれ6回以上行った後で、3回目は授業終了後、最終レポートとともに提出させた。評価観点の数の変化を表1に記す。

1回目と2回目の変化を対応のあるt検定で比較したところ $t=-3.63$ 、 $P=0.007$ で、1%水準で有意差が見られた。また、同様に2回目と3回目の変化を対応のあるt検定で比較したところ $t=-3.34$ 、 $P=0.01$ で1%水準で有意、1回目と3回目では $t=-4.01$ 、 $P=0.004$ で同様に1%水準で有意差が見られた。このことから、FW評価と紙評価を併せて実施することで、評価観点の数は有意に増加することが明らかになった。

評価観点の内容について見てみると、1回目の評価観点は「項目導入の方法」「板書の位置」といった項目を挙げていた留学生Aが、3回目の評価観点では「活動と活動に関連性があるか」「学習者に対する態度に柔軟性があるか」と对学习者の観点が具体化している。また、留学生Bは、1回目の評価観点として「言葉+文化」の可能性と、抽象的な文言であったものが、3回目では、「学習者が持っている母語と外国語の距離感を消すのでなく、あえて意識させて異文化を体験させる観点があるか」「日本語力が上がって達成感を得ることだけでなく、日本やアジアの文化を知ってもらえる観点があるか」と具体的な評価観点を提示している。また、多くの学習者が1回目には提示していなかったが、2回目、3回目の評価観点では、「練習文型が生活場面で実用性があるか」「学習者が必要とする日本語を使う授業になっているか」という実用性の観点を提示している。

表1 評価観点の数の推移

	1回目	2回目	3回目
留学生 A	12	21	25
留学生 B	11	14	20
留学生 C	14	16	17
留学生 D	11	16	20
留学生 E	13	14	12
留学生 F*	21	24	26
日本人学生 G	10	11	13
日本人学生 H	16	17	19
日本人学生 I	12	15	19
平均	13.3	16.4	19.0

* 留学生 F は日本語教育経験者

4. FishWatchr 評価の変化

模擬授業は1回目の1人15分程度から4回目の25分程度まで、授業時間が異なるため、FW 評価のコメント数及びコメント量の変化について数値的に分析することは難しい。日本語教育未経験の外国人留学生（5名）と、日本語教育経験者の日本人と経験者留学生（4名）で FW 評価の違いが見られるかどうかについて分析したものが表2である。留学生と日本人に分けて比較するのではなく、日本語教育の経験の有無で比較したのは、評価に大きく影響すると考えたからである。他者評価の平均値を見ると、良い、悪いボタンについては、あまり差はないが、？ボタンは日本語教育経験者が未経験者である留学生の2倍近く使用している。独立したサンプルのt検定で比較したが、「良い」「悪い」「？」ともに、統計的に有意な差は見られなかった。2016年度の授業では、授業者はビデオのみを持ち帰り、FW 自己評価を行ったあとで学生役の FW 評価をすべてマージしたものと紙評価コメントを渡したため、自己評価が低くなる傾向があったと考え、今回は他者評価を見てから自己評価を行う形にした結果、自己評価に変化が見られた。

表2 FW 他者評価コメントボタンの平均値

	他者評価			自己評価		
	良い	悪い	？	良い	悪い	？
日本語教育未経験者	133.8	44.8	36.2	11.6	27.6	6
日本語教育経験者	123.8	60	70.5	23.5	34	12.75

自己評価の平均値を見ると、すべてのボタンを、日本語教育経験者が未経験者である留学生より多用しているが、「良い」「悪い」「？」ともに、統計的に有意な差は見られなかった。しかしながら、2016年度の授業では、留学生も日本語教育経験者もともに悪いボタンを押した回数は良いボタンの4倍以上の数値になっていたこと（西谷・岩崎 2016）と比較すると、他者評価を参考にしてから自己評価を行った 2017 年度のほうが相対的に自己評価が高くなっていることがわかる。自分が行った授業ビデオの視聴だけで評価を行うと、悪い点ばかりが目について自己評価が低くなりがちだが、他者からの肯定的評価を得てからの自己評価では、自己評価が必要以上に低くなることなく、評価のバランスがとれるということが示唆されたと言えよう。

5. FishWatchr 評価と紙評価の比較

授業を改善するために有益な評価について授業開始直後と授業終了後に調査を行った結果が表3である。「1.全く役に立たない」から「5. とても役に立つ」の5段階で評価させた。事後調査で有益だと捉えられたのは、数値の高いものから順に「授業後の教師のコメント」「FishWatchr 文字コメント」「紙コメント」で、ともに事前調査時より数値が高くなっ

表3 有益だった評価に関する事前事後調査

	事前		事後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
FishWatchr ボタン評価をもらう	3.56	.527	3.67	.707
FishWatchr 文字コメントをもらう	4.33	.500	4.56	.527
紙コメントをもらう	4.22	.667	4.56	.527
自分の授業ビデオの視聴	3.89	.928	3.44	.726
教師からの教案コメントをもらう	4.56	.726	4.33	.707
授業後の教師紙コメントをもらう	4.67	.500	4.89	.333
生徒役を行う	3.22	.972	3.22	.833
生徒役後に紙評価を行う	3.67	.866	3.56	1.130

ているが、事前事後調査を対応のある t 検定で比較したところ、統計的に有意差が見られた項目はなかった。

紙の評価コメントと FW による文字コメントの違いを事後調査で聞いたところ、以下のような回答が得られた。①生徒役の際は先生役の指示を聞くことに集中しているので評価に集中できない。FW はそのつどコメントできる。②FW 評価している時はある程度、冷静に評価できる。③生徒役の際は生徒の立場から授業を見て、今受けた授業で本当の学習者がわかるかどうかという点で授業を見た。④FW で評価する時は同僚教師の立場でコメントした。⑤FW 評価は細かいところまで評価でき、それにそって、細かいところを振り返ることができる。⑥生徒役の評価は授業全体の評価で、実際の参加者として授業を評価することができる。先生の指示や言葉が分かりやすいかどうか、そして、この授業を通じて内容をどれくらい覚えられるかを重視した、などの記述が見られた。回答の中には「見方というより見ているものが違う」という記述も見られ、FW 評価と生徒役を行ったあとの紙による評価を併用することは、授業評価観点の多様化に有益であることが示唆されたと考えられる。

6. 個人の自己評価に着目した変化

本稿は FW を活用することにより、日本語の模擬授業評価観点の多様化の育成が可能であることを検証するものである。今回は、日本語教育未経験者である中国人留学生 A の FW の自己評価に焦点をあてて変化を観察する。中国人留学生 A は、中国の大学日本語学部を卒業後来日、日本語学校を経て大学院に入学した修士 1 年生である。日本語教育経験者ではなく、未経験者を選んだのは、経験者より変容が大きいと予測したためである。特に A を選んだのは、3 回の評価観点の変化が大きく、特に 3 回めは、「活動と活動に関連性があるか」「学習者に対する態度に柔軟性があるか」と対学習者の観点が具体化していた。

第1回の模擬授業は、動詞の現在形「ます」「ませんか」の16分間の授業を行った。FW自己評価は15コメントで、良いが3つ、悪いが12となっている。「悪い」としているのは、話す速度、カードの扱い、説明と練習のさせ方、場面の作り方、ペアワークの意味等で、「良い」としているのは、学習者に発話と練習をさせたことと、単語の導入方法である。実際に留学生Aの書いたコメントの第1回と第4回を資料2、3に記す。

第2回の模擬授業は、「イ形容詞」「ナ形容詞」の14分間の授業を行った。コメント数は14で、「良い」3、「？」4、「悪い」7である。「良い」としているのは「表情」「板書のやり方」「大事な部分を強調したこと」であり、「悪い」としているには、前回同様、話す速度、カードの扱いの他、「英語を使いすぎた」というコメントが2回現れている。「？」では、「な形容詞の提出方法」「文法規則をどこまで教えるか」「同じ絵カードを『新しい』『古くない』の両方に使っていいのか」という疑問を提出している。

第3回の模擬授業は、名詞修飾の24分間の授業を行った。コメント数は23で、「良い」4、「？」2、「悪い」17である。「良い」には、「学習者の状況を聞く」「学習者が学習者に質問をする」「難しい内容2回繰り返す」「実物教材を使う」が、「？」には「学習者が長時間答えられない場合、教師どうやって対応すればいい？答えを先に言っちゃダメ？」「文法間違えた？」が挙げられている。「悪い」には前2回にも指摘していた、話す速度、イラストや動画の使い方の他に、「教科書の活動について説明全部書いてあるからわかるだろうと思込んでしまった。」「(タスクなどで)学習者を混乱させてしまった」が見られた。

第4回の模擬授業は、「～なければなりません」の21分間の授業を行った。コメント数は28で、「良い」11、「？」4、「悪い」13で、「良い」評価が飛躍的に増えている。「良い」コメントで目立つのは「1人1人確認」「学習者が自分の話をした」「自発的な発話をさせる」といった学習者個人に目をむけるものと、「日本の文化を紹介する」「学習者を移動させる」「例を示す」「状況説明」といった教え方に関するものが見られた。

「？」については、「返却日」と「DATE DUE」と同時に言うのが学習者に理解してもらえるかな」「つもり」についてうまく説明しきれなかった」「くじの意味を理解してもらえないような気がする」の3項目である。「悪い」については、相変わらず「早口」という指摘が複数あるが、「文が長い」「いきなりの練習、突然」「デートをする前に、何をしなければなりませんか」が変」「デートの話をもっと話せばいいのに」といった指摘がある。

中国人留学生Aの自己評価は、回を重ねるごとに、学習者が授業内容をきちんと理解していくかに目が向くようになっていく。第1回、第2回の模擬授業では、自分の教師としての振舞いに注目してコメントしているが、第3回では、学習者が長い時間答えられない場合はどうしたらよいか、学習者は教科書に書いてある説明がわかるだろうと思込んでいたらそうではない、といった指摘からわかるように、教室は教師と学習者が共に作り上げ

ていく空間であることが意識されている。また、第4回ではデートの場面で新出文法を練習する計画であったが、「デートをする前に、何をしなければなりませんか」という質問を実際にしてみたところ、思うような答えが引き出せないことに気づいて、「変な質問だ」と理解した。一方、自分の授業の良い点にも多く目が向くようになったことも大きな変化である。

7. 最終レポートから見るFW評価の効果

授業終了後に以下の課題で最終レポートを提出させた。ここではFW評価について、記述内容が多かった日本語教育未経験者の留学生Bと日本語教育経験者の日本人G、H及びIの4名のレポートを取り上げて検討する。

課題：自分の授業の準備、授業、自分の授業を評価してもらうこと、クラストの授業の生徒役、FW評価者として参加したことで、「理想の日本語授業」について、どのように考えるか。

<留学生B>

私がFWでもっとも注目している2つのポイントは、「学習者が楽しんでいるかどうか」と「テキスト+α」である。そして、私はこれらの評価観点に従って、皆さんの模擬授業から素晴らしいアイデアを数回もいただいたのである。前者は、学習者の反応を観察し、参加度を維持しながら授業を進めていくように工夫することを指す。はじめの頃、私は「直接法で教えるのは無理だ」と思っていたが、模擬授業でFWしているうちに皆さんからいろいろな手段・方案を学んだ。後者は、学習項目を導入する際、文化を併せて紹介できるかどうかとのこと。学習者に自国の文化を紹介してもらうのも可能であろう。さらに、教師もそこから成長し、「異文化の地雷を踏むことを避ける」スキルを身に付けていくチャンスが手に入れられる。

<日本人学生G>

この授業では模擬授業を実施するか、他の人が模擬授業をしている際の学習者役またはFW評価者という役割が与えられた。模擬授業と学習者役の経験は今までであったが、FWは初体験だった。FW評価者という役割は模擬授業を俯瞰して見ることができるので、より客観的に、ゆっくりと他人の模擬授業を評価できた。ゆっくりと、というのは学習者の役がないので評価に集中することができるためである。学習者役やFW評価者の役割を通して、自分が最初に立てた評価を実際に他人の模擬授業を評価する際に使っていないことに気がついた。例えば、自分が大事にしようとしていた「笑い」は自分の授業では気をつけていたものの、他人の授業評価では全く気にしていなかった。その一方で、自分が模擬授業をした後のコメントで表情のことを指摘され、ビデオを見たところ確かに積極的に話していない場面では怖い顔をしていることに気がついた。今まで模擬授業のビデ

オを撮ったことはあったが、正直に言ってあまりちゃんと見たことがなかった。今回は FW 評価を見るためには強制的にビデオを見なくてはならない状況に追い込まれるため、ビデオをちゃんと見る事ができた。そこで自分の動きや表情、話すスピードを知ることができた。

<日本人学生 H>

私にとって FW 評価は初めてであり、まず FW が何であるのかを学習し、操作を学習することから始め、評価に漸く慣れてきた段階で講義が終了したので、本当に FW 評価について理解できたとは言いがたい。初心者である自分の FW 評価を振り返ってみると、①「悪い」評価は指導内容に誤りがあると確信できるときにのみ下せる。②項目の提出の仕方や教材の工夫がみられるときなど「良い」とした。③「良い」「？」評価は、授業の流れの中で変化することがあり、評価した時点に戻って変える必要のあるものもあった、などというレベルであり、十分な FW 評価ができたとは言いがたい。しかし、今後において、FW 評価の適性と限界（FW 評価で測れるもの、測れないもの）を知り記述すること、授業研究のどの面に活用できるか模索すること（この講義では授業者を評価するツールとして利用したが、授業参加者の評価の観点を探る—FW 評価をする協力者の意識を分析し「良い授業」をどう捉えているか研究する）などにより、より効果的な利用法の幅が広がるに違いないと思う。

<日本人学生 I>

FW 評価の大きな利点は、言われたことについて同時にビデオで確認できることである。FW を利用しない場合には、ビデオを使用した振り返りに時間がかかる。教案や見学者、授業実施者の記憶をもとに、言及したい場面を探すのだが、探したい場面にたどり着くのに時間がかかってしまう。FW であれば、教師の行動と学習者の反応を客観的に振り返ることができるため、評価コメントも冷静に受け止めることができる。FW を用いて振り返りを行い、ビデオだけによる振り返りよりも何倍も客観的に振り返りができたと感じている。FW が一般的な振り返り方法に劣る点をあげるとすれば、瞬間的な判断に気を取られてしまい、授業全体の構成を検討する力の養成には不向きかもしれない。

まず、日本人学生 I が述べている「FW を利用しない場合には、ビデオを使用した振り返りに時間がかかる」という点は、FW 評価が効率的な評価方法であることを示している。日本人学生 G の「FW 評価を見るためには強制的にビデオを見なくてはならない状況に追い込まれるため、ビデオをちゃんと見る事ができた」という指摘も重要である。「ビデオをちゃんと見る」ためには、FW という仕掛けが有効であるということも明らかになった。

また、「自分が最初に立てた評価を実際に他人の模擬授業を評価する際に使っていないことに気がついた」という点は興味深い。授業評価観点は自分がこうでありたいと思うものであり、他者の授業を評価する際には重視していないという評価観点の乖離に気づいたとい

うことである。留学生 B は「はじめの頃、私は直接法で教えるのは無理だと思っていたが、模擬授業で FW しているうちに皆さんからいろいろな手段・方案を学んだ」と述べているが、生徒役や紙評価からの学びではなく、FW 評価を通して色々な手段を学んだという点は興味深い。留学生 B、は主として日本語だけを用いて日本語を教える「直説法」について懐疑的であったが、FW で模擬授業評価することを通じて、客観的に教師役の教授方法を観察できたということであろう。

日本人 H の指摘からは、どのような基準で「良い」「悪い」「？」のボタンを使用したかがわかる。留学生 B は、「私が FW でもっとも注目している 2 つのポイントは、学習者が楽しんでいるかどうかと、テキスト+αである」と述べ、その内容を詳述している。他の 7 人の評価者についても、それぞれの評価基準があるはずだ。FW ボタンの評価基準を全体でシェアしてから FW 評価を始める、または、それぞれの基準を明確化して授業者に知らせるといった工夫も必要であろうことが示唆された。

8. まとめと今後の課題

本研究は ICT ツールである FishWatchr を活用することにより、日本語の模擬授業評価観点の多様化の育成が可能であることを検証するものである。授業終了後のレポートの記述から、FW 評価を利用することによって、自らの授業ビデオの視聴に真剣に取り組むこと、FW 評価を見ながらの授業ビデオ視聴は、単独のビデオ視聴より時間が短縮されることがわかった。

授業評価観点の変化を見るために期間中に 3 回、評価観点リストを提出させ、対応のある t 検定で比較した結果、評価観点の数は有意に増加することが明らかになった。評価観点の内容について見てみると、評価の観点が抽象的な内容からより具体化していることも明らかになった。

さらには、FW 評価と紙評価を授業者に渡したのちに、FW で自己評価をすることにより、他者評価を見る前に自己評価を行った 2016 年度の実践に比べて、自己評価が相対的に高くなるという結果が得られた。留学生 A に焦点をあてた第 1 回から第 4 回に至る自己評価の変容の分析からも、回数を重ねるうちに、授業の見方が多様化し、自己に対する良い評価も多くなることがわかった。

生徒役を経験した後に行う紙による評価と、授業と同時進行で注釈づけをする FW 評価では評価状況が異なることから、評価の観点も違ってくる。最終レポートで日本人学生 I が述べているように、FW 評価は「瞬間的な判断に気を取られてしまい、授業全体の構成を検討する力の養成には不向き」な部分がある。今回は教案を見ながらの授業評価は行わなかったが、全体的な評価態度を育成するためには、教案との関連を見ていく必要があるだろう。「FW 評価をする協力者の意識を分析し、良い授業をどう捉えているか研究するなどにより、より効果的な利用法の幅が広がる」という日本人学生 H からの指摘は、FW をより

効果的に活用していくための今後の課題である。

参考文献

- 西谷まり,岩崎拓也(2016) FishWatchrを利用した日本語授業評価. 日本教育工学会研究報告会 JEST16-4,pp.149-154
- 西谷まり(2016) 授業評価における失敗の観点-FishWatchr を活用した日本語模擬授業の評価実験-. 日本語教育学会研究会第8回中国地区予稿集, pp.90-96
- Nishitani,M ,Iwasaki,T.(2017)Evaluation of a Japanese Language Trial Lesson Using Fishwatchr ,*US-China Education Review A*,7(6): pp.285-292
- 山口昌也, 大塚裕子, 北村雅則 (2016) 学習者によるアノテーションを用いた協調学習過程観察支援システムの設計, 宇佐美洋編『「評価」を持って街に出よう』第13章, くろしお出版, 東京
- 山崎岳, 加藤直樹, 山崎謙介 (2011) 授業映像と参観者のメモを同期閲覧できる授業評価記録・閲覧システムの開発, 第73回情報処理学会情報処理学会全国大会講演論文集, 4, pp.499-500

資料1 振り返りシート

		実際に起こった出来事 その原因、評価、改善策など
授業の計画 (教材研究、用具の準備、目標の明確化など)		
教師の 行動	授業の運営 (時間配分、授業構成、学生の把握など)	
	教授行為 (雰囲気作り、指示、説明、指示、助言、 フィードバック、板書など)	
教材 (適切な教材であったか、教師の工夫など)		
失敗したところ 理由、改善方法		
うまくいったところ 理由		

資料2 留学生Aの第1回のFW自己評価(登場順)

悪い	話スピードが速かった
悪い	動詞の導入が急に、学習者が単語の意味が分からない
悪い	単語カードが小さい
悪い	紙の枚数が多くて、混乱してしまった
良い	一人ひとり練習させるところ
悪い	単語の意味がまだ学習者の中に定着していない、導入の方法を再考する必要あり
良い	できるだけ学習者に発話させる
悪い	既習単語復習しない
悪い	肯定・否定同じ学習者に答えさせるのがたしかに不自然
良い	発音の訂正、何回も練習させる
悪い	焦ったような気がします
悪い	練習の説明がもっと必要
悪い	字が下手、もっときれいに書かなければ
良い	わからない単語を書いて、強調させる
悪い	実際の場面を全然作っていない、勉強した文をどの場面で使えばいいかが学習者は恐らくわからない。
悪い	最後の練習意味不明、ペアワークの形を考え直す必要がある。

資料3 留学生Aの第4回のFW自己評価(登場順)

良い	動作で「本を読んでいる」を表す
悪い	早口
?	「返却日」と「DATE DUE」と同時に言うのが学習者に理解してもらえるかな
悪い	文が長い
良い	1人1人確認
?	「つもり」についてうまく説明しきれなかった
悪い	意味+作り方の説明
良い	説明が長いような気がする
良い	意味確認
悪い	いきなりの練習、突然
悪い	PPTを準備するとき、細かいところを注意できなかった
悪い	早口
悪い	「～から」があるのに、練習しなかった
良い	学習者自分の話をした

FishWatchr を利用した日本語授業評価
 —評価観点の多様化に着目して—

良い	自発的な発話をさせる
悪い	真っ先に「難しい」を言ってしまった
良い	日本の文化を紹介する
悪い	旅行の話の意味不明かもしれない
悪い	「皆パスポートを持っている」ことに気が付かなかった
悪い	「パスポートを取る」
悪い	振り返ってみれば、「デートをする前に、何をしなければなりませんか」が変
？	教師の話が多かった
悪い	デートの話をもっと話せばいいのに
悪い	自分の話だけ、やはり考えられた例が少なかった
？	くじの意味を理解しても得ないような気がする
良い	学習者を移動させる
良い	例を示す
良い	状況説明
良い	動きが自然

(にしたにまり 国際教育センター教授)